

## 西村ゆりさん●音楽教師／「光の音符」代表 インドのハンセン病の子どもたちを教育支援 与えることでもらう人生

クラシック演奏会に点字プログラムを置き、識字教育や音楽療法を通してインドのハンセン病の子どもたちをサポートする。障がいのある人や子どもたちの、光り輝く笑顔が糧。ここへ至るには紆余曲折がありました。見えざる手とご両親の生き方とに導かれた、すべてが現在につながる道でした。



にしむら・ゆり

1956年京都市生まれ。同志社大学文学部文化学科美学及び芸術学専攻に入学後1年次で退学し、翌年同志社女子大学芸学部音楽学科に入学。81年、卒業と同時に京都市立呉竹養護学校に勤務。82年より京都市立栗陵中学校専任講師（音楽）。83年8月から翌年8月まで西独（当時）ハンブルクに留学。音楽をクラウス・オッカー氏に師事。94年「光の音符」設立、2004年「光の教室」をインド・ムンバイに開設。10年6月、インドにおける「スラムの子ども達の自立力向上のための音楽指導者育成計画」がJICA草の根技術協力事業に採択される。同志社女子大学嘱託講師、京都府医師会看護専門学校講師。

光の音符 <http://hikari-no-onpu.com/>

### ドイツ留学の出会いから ボランティアの道へ

ボランティア活動を始められるまでの経緯を教えてください。

西村 ドイツで学び、とことん考えた経験が深く関係していると思います。まず大学を卒業した後、直接近所の養護学校にでかけ、「一番しんどい仕事をください」とお願いしたら、生活介助員の仕事を薦められました。食事と排泄のお世話です。一番身近なところで子どもたちと触れ合いたいと思って行ったのですが体

力が続かなくて1年で辞めてしまい、自分の未熟さを思い知りました。次は市立中学校の音楽の専任講師。私の着任直前まで窓ガラスが全部割れていたような時代で、当時人気のあつた松田聖子さんや近藤真彦さんの歌を題材に授業をするなど初めての経験をしました。それでも無我夢中で過ごすうち、生徒たちは徐々に心を開いてくれた。いかつい男の子たちが「おまえはええ先生やと思うけど、音楽をもっと勉強せなあかん」とか、率直にものを言ってくれるようになりました（笑）。

生徒たちは流行の歌謡曲を歌いたい、そして私にもピアノを弾いて一緒に歌ってほしかった。それが彼らの音楽に対する思いでした。考えてみたら、私は音楽の本質を何も学んでいなかったのではなにか。そこで女子大学の鶴淵紹子先生に相談したところ、先生の留学時代のご友人を紹介してくださいました。それが当時の西ドイツにおられたクラウス・オッカー先生で、私はハンブルクに留学することになったんです。

西村 そこで大きな出会いがあった。そこで大きな出会いがあった。そこで大きな出会いがあった。そこで大きな出会いがあった。

人前で、フィッシャー||デイースカウの代役を務めて認められたこともある素晴らしいバリトン歌手です。彼が教えてくれた歌の本質とは「聴いてくださる方のための音楽」でした。聴きたい人が目の前にいるのなら、直ちに心を込めて歌う。それが1人でも1000人でも、歌う態度や気持ちはまったく同じであると。私が学生時代に考えていたのは上手に歌うことでした。自分がベストの状態でない」と歌えないと思ひ込んでいました。先生は、それは違うと言う。歌うあなたは「道具」なのだ、*you*（私）ではなく、*you*（それが歌うのだと。「それ」があなたの体を使って歌う。音楽とはそういう神秘的な作業から生まれるのだと。実際に先生が歌うと、聴いている人がとても幸せそうな顔をするんです。私は当時20代でしたがクリスマスチャンでしたので、先生の言いたいことがおぼろげながら分かる気がしました。

西村 でも音楽家への道は選ばなかった。半年が過ぎた頃、疑問が湧いたんです。私は本当に音楽家になりたいんだろうかと。音楽とは残酷なもので、才能が必要です。オッカー先生が一流とすれば私は生涯、二流で構わない。その上で私には何が出来るんだろうと。考えに考えた末、今まで一番楽しかつ

たことは何だろうと思った時、中学校で生徒たちにいじめられ、泣いたりしながら教えた日々が浮かびました。若い子たちといる時、私はとつても楽しかった。私は教育に向いているのかもしれない。もっと自由に、もっと人間の本質と絡めた音楽教育をしたい。ただ私のやりたいことは日本の公教育ではできないかもしれない。せつかくドイツに来たのなら歌だけでなく、関心を持っていたシユタイナー教育を学ぼうと思いました。

西村 シユタイナーハウスを訪ねると、拙いドイツ語で訴える私に職員の方が2時間もかけて丁寧に應對してくださいました。非常に感銘を受けました。そういう方たちが大切にしている教育を学ぶ価値はあると確信しました。シユタイナーハウスでしばらく学び、ドイツに来て1年後に帰国。その後は川崎市でシユタイナー幼稚園のお手伝いをしながら、日本語でシユタイナー教育の基礎を勉強し直しました。私のわがままを許してくれた両親には本当に感謝しています。

西村 後年結婚してしばらく経った時、先生が京都でコンサートをすることになった。先生が京都でコンサートをすることになった。先生が京都でコンサートをすることになった。先生が京都でコンサートをすることになった。

先生が彼女の手で自分の口を触らせながら教えると、その子の声がどんどん変わってくるんですね。学校の生徒たちもみんな全身を耳にして楽しんでくれた。この子たちこそコンサートに来たいんじゃないか、クラシックの演奏会はこういう子たちこそが楽しめる場であるべきではないか。本当に音楽を求める人が聴きに来れない文化は貧しい。オッカー先生のコンサートは点字プログラムのお蔭で視覚障がい者の方が大勢来て、とても楽しんでくださった。そこで音楽仲間7人に声をかけて発足したボランティアグループが、点字プログラムを作る「光の音符」です。会場に来られない人のために出張コンサートも始めました。

## 父に導かれた ハンセン病患者との縁

——インドとの出会いを教えてください。  
**西村** 川崎にいた頃、インドのアグラにいた父（西占貢氏）が倒れたという知らせを受けました。父はハンセン病専門の医師で、京都大学の皮膚科特別研究所の2代目所長を務めました。日本は長らくハンセン病患者に対して強制隔離政策を取っていましたが、京大だけはこの研究施設を設けてハンセン病患者にこっそり外来治療を行っていたんです。私がドイツから帰国した時、父は既に定年退官してJICAの事業でアグラへ行き、現地の医師に電子顕微鏡の使い方を教えていました。その父が脳溢血で倒れた。母は開業医だったので自分の患者さんを置いていくわけにいかず、私がアグラへ行くことになりました。

父はデリーの一番大きな病院の集中治療室にいました。一方で、お金のない人は廊下で毛布にくるまって治療を待ち、死んでいく。私がお医者さんに「父は助かりますか」と泣きながら尋ねたら、笑われたんですね。生きるか死ぬかは神が決めることで自分の知ったことではない、ホテルに帰っておいしいものでも食べて出直してきなさいと。ああそうなんだと

思ってた翌日からはインドライフを楽しみ、お医者さんとおしゃべりしながら2ヵ月間父の世話をし、最期を看取りました。インドから日本に帰ると、シユタイナーの勉強を続ける気はなくなっていました。——西村さんの中で何が変わったのでしょうか。

**西村** シユタイナーで学んだことは、インドでは当たり前だったんです。人間の魂は次の世でまた生きて鍛えられていくから、この世で辛いことがあっても絶望することは無いというのがシユタイナーの考えです。インドでは生まれ変わるの当たり前。人が普通に「このハエは前世では私の友だったかもしれない」などと言う。結局ドイツでシユタイナーを学んで日本に帰るなんて、私は第一人者になって名声が欲しかったんじゃないかと思うと、私はもつと普通の生活をしなければと思ったんです。両親の背中を見て、私も勉強して専門職に就くのが当然と考えていたけれど、私は大根一本の値段さえ知らなかった。普通に暮らすことの尊さに気づいた時、ずっと私を待ってくれていた人と結婚しました。これからは地に足を着けて生きていこう。そして子どもが生まれ、オッカー先生が京都でコンサートを開き、私たちの新しい活動が始まったんです。

## 母の葬送の旅から生まれた 「光の教室」

——インドでの活動を教えてください。  
**西村** 「光の音符」は父の患者さんとのご縁で国立療養所邑久光明園にも出張コンサートに行き、以来交流が続いています。その中で、園の方たちと一緒にできること、次世代につながることをもつとしなければと考えるようになりました。そんな時、2002年に母が他界。アグラの父の墓に入れてほしいという遺言に従い、17年ぶりにインドへ行くことになったんです。

父を看取った時にお世話になった先生方の依頼で、アグラに父が建てたハンセン病治療施設やナグプール、ムンバイの病院でもコンサートを開き、光明園からのメッセーじも届けました。ムンバイではハンセン病医療に携わる医師のNGO「Brid (Banbay Leprosy Project)」がスラムを見せてくれました。そこでハンセン病患者さんたちがそのまま生活をしている。十分な治療を受けないまま結婚して出産すると、どうも子どもたちも同じ病気がらしい。日本に帰って光明園の方に報告すると、その子たちのために学校を造りなさいと言う。インドへ知らせると、鶏小屋を借り、約50人のス

ラムの子どもを集めて、ひとりの老シスターが教室運営に孤軍奮闘されており、継続が困難になっているという情報もたらされました。先ほどのNGOが窓口になり、日本とインド両国の協力でその教室を運営していくことが決まり、日本から運営資金を送る活動が始まりました。子どもたちを教える先生は、インドの普通の主婦の方たち……。それが「光の教室」です。

光の教室では、1人につき年間1万円あれば午前中に識字教育を受け、午後から公立学校に行ける。給食も食べられます。日本で約100人が里親になつてくださいました。私は年2回お金を持ってムンバイに行き、音楽を教えながら子どもたちと遊んでいます。

——活動の成果はいかがですか。

**西村** 識字教育を行っても、やはりその先にあるのは貧困なんです。光の教室には15、16歳までしか子どもたちは来ません。女の子は同じような境遇の人と結婚させられたり、男の子は日雇い労働をしたり軽犯罪に手を染めていたりする。せつかく音楽を教えているのに、もう一歩彼らの将来のためになることをしたかった。そこでJICAに申請をすることになりました。4年間苦勞しましたが、今年の6月によく認められて予算が

つき、音楽療法を通じてハンセン病の子どもたちの精神的自立を支援する活動が2011年1月にスタートしました。今は日本の大学生が中心になって活動してくれています。学生たちがそこで成長することにも大きな意義があると思っています。

——音楽療法とはどのようなものですか。  
**西村** 人を癒す力が音楽そのものにあるんですね。打楽器は特に効果があると思います。リズムを通して会話ができるし、手の体操にもなつてリハビリ効果がある。光の教室では、子どもたちに音楽でとにかく遊ばせるんです。遊んで、笑う。笑うと心も体もやわらかくなります。

## 導かれて 「なつていく」人生

——ボランティア活動に対する信条があればお聞かせください。

**西村** 人助けは難しい問題もありますが、余ったものをあげるという考えではだめです。自分の一番大切なものを手渡す、捨てるくらいの気持ちが必要ではないでしょうか。人は「与える」ことによって、相手から「もらう」。この世の損得勘定とは逆方向に動くと、それがすごい力を発揮することがある。想像もしなかった大きな恵み、喜びを感じることがあります。

す。

——継続するには力が要りますね。

**西村** しんどくても続けないといけない時は、無理をしてもやり遂げる。学生たちには、この粘り腰を伝えていきたいです。私はいつも出会いやご縁には何か意味があるのだと思って、導かれるままに行動してきました。今の学生さんは賢いし如才ないのですが、小賢しく計算する人になつてほしくはありません。きちんと感情を出して本音を出し、「きちんと生きている人」になつてほしい。それを学ぶためにインドは最適の国。人の生死を目の当たりにする国であると同時に、お金次第でどうにでもなつたりお金のない人がすこく良くしてくれたりする、人が本音で生きる国ですから。

——これから社会へ巣立つ卒業生へメッセージをお願いします。

**西村** 「なんとかなる」という言葉を贈ります。「する」と「なる」とは違いますよね。本当に大切なものは「なつていく」こと。今見えなくても、どこかで神様が計画してくださっている道があると思うと、楽になれます。それでも迷った時は私が卒業時にそうしたように、より難しい道を選んでみてはどうでしょうか。（2010年11月11日、京都市左京区の自宅にて）

中嶋庸郎さん●作詞家

書き続けて約1000点

## 心の窓を開ける「風」を書く

学生時代に聴いた、太田裕美さんの「木綿のハンカチーフ」。この楽曲の作詞者、松本隆さんに影響を受けたことが音楽人生のターニングポイントになりました。以来、飾らない言葉を紡いで水彩画のような世界を創り出しています。中嶋さんが詞に乗せて人々に届けたいものは、何なのでしょう。



なかじま・のぶお

1956年大阪市生まれ。79年、文学部社会学科新聞学専攻卒業。卒業後、実家の中嶋燃料㈱に勤務。家業と並行して作詞を続ける。京都府商工会議所青年部の歌、NPO法人京小町踊り子隊に提供した「京小町音頭」のほか、社歌、CMソング、フォーク、ロック、シャンソン、J-POPなど幅広く活動中。現在まで書いた詞は1000点近く。企画制作から参加した、プロシンガーでシニア野菜のソムリエの関宏美さんのCD「ストロベリームーン」が2010年12月に発売された。

## 映画から音楽へ、音楽から作詞へ

——軽音サークル「とんがりぼうし」のご出身ですね。

**中嶋** 大学時代は音楽に熱中していました。最初は1年余りハードロックをやつて、ギターやキーボードを担当。やがてニューミュージックに移行して、他大学の人とバンドを組んでいた時期も。4年生では今で言うJ・POPのコピーを中心にボーカルとして活動しながら、歌詞を書いていました。

——卒業後はご実家を継がれました。

ルの「スカポロー・フェア」が流れる部分があります。この曲が流れると僕は映像の中に、透明な哀しみを含む風を感じます。自分の心のささくれた部分に音楽が染み込むような、言いようのない切なさがある。そこに生じる。クライマックスの教会へと続くシーンでは主人公の車のガソリンが切れて、止まりそうになりますね。ここはギター一本だけで彼のもどかしさを見事に表現しています。教会にたどり着いた瞬間も、やはりギター一本の和音と教会全体の絵だけで、すべてを表現している。音楽に興味を持ち始めた中学生の僕は圧倒されました。

——音楽の仕事を目指しながら同志社大学を選んだ動機は何だったのですか。

**中嶋** 高校時代は理系クラスにいたものの、次第に芸大や芸術学部の受験を考えたようになりました。結局芸大は諦めましたが、当時の音楽シーンで聖地のようだった京都に来たいと思ひ、憧れだった同志社大学を受験したんです。当初は美学芸術専攻に行こうか、シンセサイザーを学びに電子工学科へ行こうかと迷いました。最終的に新聞学専攻を選んだのは、メディア方面から音楽というものを考えようと思ったから。山に登るのに

**中嶋** 4年生にもなると周囲は髪を切って就職活動をしている。さて、僕はどうしよう。音楽を続けたいけれど、音楽だけで食べていけるほどの才能もない。家は灯油の卸しを中心なので、夏は暇になります。夏に音楽に打ち込めるならその間に親の仕事を手伝っていましたから、ごく自然に家業を継ぎ、同時にずっと音楽に関わり続けています。

——音楽に興味を持たれたのはいつ頃ですか。

**中嶋** 中学2年生の頃です。ギターを弾

いろいろな道があるように、どの道へ進んでもいずれば音楽にたどり着いたと思います。

——そして卒論のテーマが「松本隆と都市、その接点」ですね。

**中嶋** 松本さんの歌詞を題材に、都会的視点から非都市へのつながりを考察したものです。先生から「ここは社会学のゼミだから芸術的視点は避けるように」と、本意ながら釘を刺されました(笑)。松本さんご本人にも電話をかけて東京まで会いにいき、そのまま泊めていただいたこともありました。今こそ松本隆の詞を大学で取り上げる学生がいるようですが、当時は「そんな学生は君が初めてだ」とご本人から言われました。それだけ松本さんの歌詞が好きだった。「言葉の絵の具」で都市を描く人だと感じていました。

78年頃、いわゆる歌謡曲では阿久悠さんたちの詞が全盛でした。そんな中で「木綿のハンカチーフ」などを書いておられた松本さんの詞は、本当に絵画的でした。言葉がさらさらとしていて、油彩ではなく水彩画的です。作品に透明感があって、聴き手に押し付けるようなところがありません。当時の僕はドロドロした歌は苦

手でしたから。そして松本さんは「都会、都市」という観点から「田舎、自然」を捉えています。都会そのものの風景や、都会からみた自然をさらりと描く。大阪の真ん中で生まれ育った僕にとつて、自然や田舎は憧れだったんですね。逆に言うと、都会っ子という立場は僕にとつてはコンプレックスだった。そんな中、松本さんの詞には勇気づけられました。僕もこんなふうには書けばいいんだと。ごく自然にコンプレックスから解放されて、都会の風景や大好きな田舎の自然を書くようになったんです。

## さりげない言葉で物語を輝かせる歌づくり

——今までどんな詞を書いてこられたのですか。

**中嶋** パンクロックからシャンソン、演歌、音頭に社歌、さまざまです。採用されませんでしたが大阪市のオリビック招致のための音頭を書いたこともあれば、中学生くらいの気持ちで歌う詞も書きます。幅広い歌手へ詞を提供させていただくので、いろんな方と知り合いにもなれる。最近では新しい形で京の町おこしをしているNPO法人京小町踊り子隊

のために「京小町音頭」を作詞しました。踊り子隊が海外公演に出かけ、僕の書いた詞が歌に乗って世界を駆け巡る。これは嬉しいですね。

——詞はどのようにしてつくるのですか。  
**中嶋** 「いい詞をください」と言われるのは、真つ白な画用紙に一から絵を描くようなもの。「夏の絵で、登場人物は一人」というふうな、細かく材料を提示してもらう方が書きやすいです。僕は押し付けのような詞は書きたくありません。いつも心がけているのは、作曲者が最も望んでいるイメージを大切に、ボーカルが気に入ってくれる詞を書くこと。聴いてくれる人の心を書きながら、松本隆さんから学んだように自分の言葉をパレットに出して色をつくっていく、色ができたら詞にします。まだまだ簡単にはできませんが、コアになる言葉ができたら詞の8、9割は完成したようなものです。そこに枝葉を付けて整えていく。先日、学生時代の友人から久しぶりに電話をもらいました。彼のために詞を書きたくなくった。コアになる言葉は「20年ぶりの声」です。そこへ嬉しかった気持ちや、同志社の懐かしい風景が加わる。車に乗っていて信号待ちの時、ふと浮かんだ言葉を

メモするなどして、言葉が生まれるのを待つこともあります。スケッチに近い作業です。曲が先にある場合は、そのラインに沿って塗り絵をするような感覚ですね。

——言葉も豊富をお持ちなのでしょうね。  
**中嶋** 作詞家には文学に詳しい方も多いと思いますが、僕の言葉はそんなに多くないかもしれませんが、でも、たくさんコードを知っている作曲家が良い曲を書けるとは限らないでしょう。たくさん言葉を知らなければ国語辞典をたくさん引けばいい。作詞はそういうものではないと思います。何気ない言葉でも、いかにそれを輝かせるかが大切なのではないでしょうか。

最新の作品「ストロベリームーン」は千年を超える恋の歌です。これを書き始める際、心は液体のようなものではないかと考え、湿度感を出したいと思えました。「溶け出した 私的心/時間の斜面を ゆっくり/流れ始めて 夜の中へ」奈良の平城遷都1300年祭の応援ソングに選んでいただき、プロシンガーでシニア野菜ソムリエの関宏美さんに平城宮跡で歌っていただきました。

### 心の窓が自然に開く ゆるやかな風を届けたい

——同志社大学時代の思い出を。

**中嶋** 僕の通った中学・高校はカトリックでした。かわいがってくださった先生もおられました。物差しで髪の毛の長さを測るなど校則の非常に厳しい学校でした。反発もしましたが、そこではキリスト教を知るといって、いわば初期設定が自分の中で行われたと思います。そして同志社ではあの自由な空気の中で、キリスト教の魅力が自由にインストールできました。見るもの聞くものすべてを自分の思いのままに取り入れられた。新島先生のお蔭かもしれません。自分の中のキリスト教が時間をかけて発酵したんですね。同志社にはそういう酵母菌が棲んでいる気がします。教会には今でも時々行くんですよ。国内でも海外でも、ふつと教会に入るときがある。礼拝堂の、あの空気が落ち着くんです。いつかは洗礼を受けるのではという予感もあります。

——今後、ご自身の詞を通して、歌を聴く人にどんな思いを伝えたいですか。

**中嶋** 例えば矢沢永吉さんや中島みゆきさんなどの天才がつくる歌には強烈なイ

ンパクトがあります。しかしあまりにも強い風が吹くと、びっくりして窓を閉めてしまう人もいるでしょう。一瞬で部屋の空気が入れ替わるような強い風に驚いてしまう。僕はそうではなく、逆に人が思わず窓を開けたくなるような、やさしい風のような詞を書きたい。4月や5月のような風です。部屋の空気が入れ替わるのに時間はかかりませんが、自分らしい、穏やかな気持ちを届けられたら。すべてを包み込むような同志社の空気と、まさに同じものをめざしているのかもしれない。

家業では炭の卸しもしていますが、炭には個人的に思い入れがあります。特に木炭は原料の木によって違うし、伐採する季節、焼き方によっても仕上がりが違う。そして形状や大きさ、使い方によって適材適所がある。奥深いです。炭も音楽も、同じなんです。鰻屋さんが木炭で鰻を上手に焼いて、それを食べたお客さんが「おいしい」と喜ぶ。音楽なら、ボーカルが僕の書いた詞で歌う。それを聴いたお客さんが喜んでくれる。一番大切なのは心を伝えることです。自分の思いを押し付けるのではなく、向こうにいる人が気持ちよくなるように自分の心を

伝える。いくら「これはいい炭だから」と持つていっても、職人さんが気持ちよく焼いてくれないと、お客さんが満足する鰻は焼けないでしょう。

——作詞活動で一番嬉しい瞬間は。

**中嶋** マザー・テレサの、印象的な言葉があります。「大切なのはどれだけたくさんのかをしたかではなく、どれだけ心を込めたかです」それは木炭でも音楽でも、日常生活でも同じ。僕の詞がボーカルによって歌になったとき、折鶴が息を吹き込まれて、ふわっと膨らむような感じがするんですね。僕が心を込めて書いた詞を、ボーカルが心を込めて歌ってくれる。僕自身にとっては、それが一番嬉しい瞬間です。

——今後、特に書いてみたい歌はありますか。

**中嶋** どうでしょう。大好きな同志社の歌が書けたらいいですね。カレッジソングの類はおこがましいので「同志社わらべ唄」とか。部屋の隅に火鉢があつて、部屋全体がぼかぼかと暖まるような歌にしたい。「京小町音頭」にも京都が大好きという僕の気持ちを込めたので、同志社が大好きという思いを書いたら最高です。——読者の方々、特に新しい卒業生への

メッセージをお願いします。

**中嶋** 数年前、「とんがりぼうし」の後輩の学生さんたちに会った時、「音楽をしても将来、何にもならない」と嘆くのを聞いて寂しく、悔しい思いをしました。そんなことはありません。音楽でもサッカーでも、学生時代に何かをやっていた人は必ず何かを得ています。全国大会に出場でもしていれば、強烈な風を受けたことでしょうか。そうでない人でも、先ほど言ったような、すぐには気づかない風を受け続けていたはず。打ち込んだことがあれば、何年、何十年か経って絶対に何かが自分の中から湧いてきます。僕も今回のお話をいただいて、いろんなことを振り返り、新たに気づくことがあります。同志社の卒業生には立派な方が大勢おられるのに「地の塩、世の光」だなんて、僕でいいんですかと聞き返しました。「世の光」だとしても、僕は光の粒子の、ほんのひと粒です。鮮やかな打ち上げ花火ではなく、蛍のようなもの。けれど蛍もたくさん集まれば、ほわんときれいに輝きます。若い方々も自信を持ってください。卒業してからのスタートです。(2010年11月7日、大学クラーク館ラウンジにて)